キースキル講座を通じて集団主義を考える

～若者と向き合って、つきあって、思いっきり労協してる私～

花崎昌子（労協センター事業団　滋賀エリアマネージャー）

黄色のシャツの青年

ある初夏の日の夕暮れのことでした。東京駅から新大阪行きの新幹線。金曜日とあって、喫煙席の指定券しか取れなかったのですが、禁煙の自由席を何とか確保して安心していると、通路を挟んで隣に座っていた黄色のハデなＴシャツ姿の20代の若者が、「どうぞ！」と、立っていた同世代のサラリーマンに席を譲っていました。

私はトイレ前で立っている彼の所へ行って、「この席空いてるから、そのチケットと交換しない？」と喫煙の指定席を差し出しました。彼も同じ京都行きのチケットでした。混雑した中で、私と交換した喫煙席のチケットを持って、何車輌か後へ向かって、彼は歩いて行きました。

京都駅のホームに到着すると、前方の車両から、黄色の若者がこっちへ向いて歩いてきます。

「ありがとうございました。」

「遊びに行ってたん？」

「はい」

「何で席譲ったん？」

「なんか、ゴッツウしんどそうやったし、もう立ってるのが精一杯みたいやったし・・・」

「優しいじゃん！フリーターだ？」

「夜、倉庫で働いています。」

「やりたい仕事が見つからないんだ？」

「まあそうですね」

照れくさそうな返答でしたが、背も高く、いい目をした好青年です。近鉄とＪＲに「じゃ」と言って別れて・・・。青年について想いをめぐらしました。「フリーター青年、くたびれた若いサラリーマンに席を譲る」か。そのサラリーマンも、やりたい仕事に就いているかどうか定かではないと思いやったのだろうか？自分と比べて正職に就いている彼をうらやましいとか、ねたみとかもなく、素直に困った人を助けたいということだったのだろうか？けっこう、いいヤツが、伸びる環境にいないと感じることが多くなったなあ。労協で、若者の就職支援を昨年から受託し始めたからか、気軽に声をか

けて、そして思いやることが多くなりました。

7月開講の若年者介護福祉コース

7月から始まったポリテクセンターからの4ヶ月若年者介護福祉コースでは、8月6日に栗東歴史民俗博物館へ行きました。そこは、栗東事業所が清掃の委託も受けていて、「平和のいしずえ2005」の特別展が催されており、授業の一環として見学に行きました。常設会場は、土器等の古墳時代からの展示物もあります。特別展は、栗東市の人々の「銃後のくらし」を理解する展示物が並んでいて、若い同世代の学芸員によるレクチャーを受けました。その後、100年前に建てられたかやぶき屋根の家で、ジュースを飲みながら、1週間に2回は、虫の駆除のために燻しをしているという70代のおじさんのレクチャーを聞きました。そして、8月11日には、2期生で、千葉の「若者自立塾」の準備に奔走している東君と、連合会の古村専務を囲んで、「本音でトーク」を皆でしてほしいということで、私はその時、集団主義について自分の思いを熱く語りました。

アオバナ摘み

8月11日「本音でトーク」の口火を切って

私たちの中学生の頃は、集団主義について、日本人の特質として悪い意味で自己批判することが云われていました。学校でのイジメや集団リンチのような、弱い者に攻撃する時などの心理について語る時に。きっとそれは、戦争時代に、敵地で人を殺す時、あるいは、銃後の日本や地域を守る隣組の中で、少数意見を認めない集団の威力はすさまじかったという反省からでしょう。この前、みなさんと行った平和展で、あの学芸員が語ったこと、あの時代に暮らしていた人々の心理について、覚えていますか？「・・・・・おそらくこの時代の人々は、あまり奥深く物事を考えなかったんじゃないでしょうか。いつ空から爆弾が落ちてくるかわからない、徴兵されるかわからないという状況の中で、ただ単純なスローガンが体を動かした」と。（古墳を作ったり、狩りをしたり、・・・・という時代の心理と比較して聞こえて、私にはおもしろかったんですが）、同世代の若者が熱心に語る姿とまた聞くみなさんが滑稽で、その後、かやぶき屋根の中で輪になって座って、有田さんが照れくさそうに、「ウチ8時15分に黙祷したで！車、運転して学校へ向かってたしな」と言った時には、私は嬉しく聞きました。60年前のヒロシマの原爆投下の時刻を意識している若者が存在し、素直にそれを人前しゃべってくれたことを。有田さんは7年前にお父さんを亡くしたって自己紹介で言っていたし、家族を思う気持ちがよくわかるんだなあと想像していました。

さあ、集団の質を高める努力をしてみませんか？

たかが、14人の集団です。それなのに、みなさんは、1つの集団としてまとまりを作ることが難しいのです。考え方も違うし、この前のジュースもひとりひとり違う好みがありました。敵がいて、倒すという目標もない。皆、ひとりひとり失業している、就職を目指している、自分は他の人とは違う、高校を出ている人、大学を出てる人、学歴も違います。学力別にクラス分けをされた高校2年生・3年生の頃とも違います。どうやら、福祉の道は、簡単ではなさそうだなという事が解りはじめたというところは共通しているかもしれません。もう少し一歩踏み込んで、この同じ仲間に、どうして前の仕事をやめたか、今、福祉の道をすすもうと思っているが、どんな心境か・・・等を語ることで、集団の質を高める努力をしてみませんか？労協には、そんな皆さんをサポートをして行きたいという人が少なからずいて、今日は2人、参加してくれています。確かに、ひとりひとりが自立してサバイバルをすることも大切であるという考えもあります。でも、福祉の仕事は、皆が幸せになることを目指しているのだから、これからは更に、同じ職場の仲間の中で、チーム運営に入って行くことですから、その訓練としても、集団の中で、はっきりと自分の意見や考えを語れるようになってほしいと思っています。そして、自分を誉めてくれたり、叱ってくれたりする大人がいることが、涙が出るくらい嬉しいと感じるものです。「社会人」になっていくということは、そういう事ではないですか？労協は、この若年者講座で、そういう手助けをしたいと思っています。

少し気まずい空気が流れて・・・

この後、生徒からは、気まずい空気も流れながら、様々な本音が飛び出してきました。ほんの4ヶ月間で、本音を語る意味はないという人。未だに、仕事をやめた理由は語れないと自分の今を確認した人。本当は海外青年協力隊に行きたかったけど落ちたと言いながら、日本にいて福祉の道もいいかなと思いはじめた人。今まで、障害を持った方がお店にきても、腫れ物にさわるようにどう接していいか解らない自分がイヤとずっと思っていた人。その場も教室も緊張している、涙が自然に流れ、学校に通い初めてずっと夜眠れないという事を吐露した人。

2 人のアドバイスとその後

東君は、福祉の現場でお年寄りは自分をさらけ出している、自分たちもさらけだした方がいいのではないか？とアドバイス。古村さんも、若い頃に無くしたものの数々を挙げていました。人前で話すことは、ずっと苦手だったということもおっしゃっていました。

その後、その日欠席した男の子の話で、やっと、集団としてかみ合った討論になってきました。授業態度が悪いという彼に対して不満を持っている女性と、彼をフォローする仲間と。大方は、仲間なんだという意見でした。同じ再就職を目指す仲間なんだという集団づくりが、一歩、引きあがった

アオバナ摘み

瞬間でした。4期生へ伝統を引き継ぐ自覚も、集団づくりの大切な要素で、実習先には迷惑をかけてはいけないという緊張もでてきました。

ふっと、有田さんの顔を見ると、目が潤んでいて、この話し合いが良かったと思ってるんだなあと、もらい泣きしたい気持ちになりました。そういう時、また就職支援に力を注ぎたくなるパワーをもらうのです。

東君には、花崎さんは「断定しすぎる！」と、指摘され、断定こそパワーの源よ！と思いこみながら、古村さんには、今日は、「自分をつかむ」という「キースキル講座」だったんではないかとまとめていただく。

健康的な、良い意味での集団主義が、若者が「社会」へ移行する時期にとって、もっとも大切な要素だと再確認した一日でした。そういう環境づくりを、先輩のおとなが作っていかざるをえない時代だと思っています。労協の「キースキル講座」は、人間臭い雰囲気で、どこか昔懐かしいもの・・実はオーソドックスで、人間味あふれる講座になっているのです。労協の運営のしかたに近いもので、私たちが労協の先輩から受けてきたものを、次の世代に渡していることなのかもしれません。思いっきり労協を、若年者講座でしているのかもしれません。

2005年8月15日